

平成21年5月1日現在

研究種目：基盤研究（C）  
 研究期間：2005年～2008年  
 課題番号：17530357  
 研究課題名（和文）：「小集団営農」の可能性：現代農村における新たな営農志向の集合的な形成と展開  
 研究課題名（英文）：Sociological Study on the Role of Small Group in Contemporary Farmers' Situation  
 研究代表者：徳川 直人（TOKUGAWA Naohito）  
 東北大学・大学院情報科学研究科・准教授  
 研究者番号：10227572

研究成果の概要：東北・北海道の農村で資料収集・参与観察・インタビュー等のフィールドワークを実施した。結果、営農志向の形成は相応の村落関係を媒介としていること、しかしそれは単に組織的な生産の単位としてだけではなく、また生産技術の普及や経営戦略の共有という意味だけのものでもなく、家族関係やジェンダー、自然観や農業観、広くは生活哲学や農村文化の形成・学習とも関連すること、その面ではインフォーマルな集団関係が重要な役割を果たすことが明らかとなってきた。

## 交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2005年度	500,000	0	500,000
2006年度	700,000	0	700,000
2007年度	700,000	210,000	910,000
2008年度	600,000	180,000	780,000
年度			
総計	250,000	390,000	289,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：社会学・社会学

キーワード：社会学，農村社会，営農志向，小集団，集合過程

## 1. 研究開始当初の背景：

今後の日本農村の担い手像とかかわり、新たな形態の共同性が模索されている。しかし、村落関係はもはや自明のものではなくなり、農民自身にとっても意識的に学習し積極的に形成すべきものとなってきている。

また、今日の自由市場状況のなかで農家たちは流通や販売のことをも考慮に入れた営農を志向せざるを得ない。そこで求められる差異化は、たんに経営の戦略論だけではなく、

しばしば自然観や農業観ひいては、労働力配分とかかわる家庭内役割分業意識やジェンダーをはじめとする生活哲学の根本的な変容をも伴うこととなる。農民の有志的な結合のなかには、これらを目的意識的に探求してゆこうとする同志的な性質が現われざるをえなくなっている。

## 2. 研究の目的：

こうした状況において、有志的また同志的

な「小集団」ないし「ゆるやかな集合体」が営農志向の集合的形成にかかわって果たす役割が重要性を増してきていると思われる。本研究の目的は、その萌芽やバリエーションをとりだし、そこに見られる集まりの質的原理を解明するとともに、そこで形成される営農志向の特色をとりだし、それと対応する意味世界について分析を試みて、その意義と可能性を探ることである。

ここにいう「小集団」および「ゆるやかな集合体」とは、次のような意味である。

(1)「小集団営農」とは、とくに稲作地帯を念頭においた仮説であり、同一集落のうちの数人からなる農民の小集団が組織として生産活動を展開し、地域とケースによれば請負耕作などによって集落営農の担い手となる傾向を示す場合を指す。この場合の農民は専業か兼業を問わず活動にフル参加できる専従者もしくはそれに準じる者であればよい。

(2)「ゆるやかな集合体」とは、農民たちが既存の枠組みにとらわれず上の例よりもゆるやかに結合して、交流会や学習会を通じ、新たな営農志向を集合的に形成しようとしている場合を指す。

両者に共通しているのは、新たな営農志向の集合的な形成と展開という視線である。両者は、本来、別個の研究課題として分離しなければならないが、(1)にかかわる課題関心を(2)のそれが包含するので、当面、(2)から(1)へという方向で研究を進める。

### 3. 研究の方法：

(1) フィールドワークの継続：研究代表者がこれまでおこなってきた東北・北海道の農村（北海道釧路地方、空知地方、山形県庄内地方）などにおけるフィールドワーク（現地資料の収集、機関聴取、インフォーマント・インタビュー）を継続すると共に、それをいっそう深化させる。すなわち、親密なフィールド関係の構築と維持、個別対象者に対する深いインタビュー、また、対象者たちの集合過程（学習交流会やインフォーマルな集まりなど）への参与などの方法である。

(2)「営農志向」概念の洗練：「営農志向」は、今後の営農の方向性について可能的・現実的な選択肢を概念化したもので、それをキーワードとした研究は、研究代表者を含む研究グループがすでに20年以上にわたり積み重ねてきている。ここにいう可能的・現実的な選択肢の背後には、家族労働力の存在と配分の問題が第一義的な規程要因として存しているが、本研究ではこれに生活観・農業観・自然観の問題などをも含めて考える。そして、これについては、一般的に用いられがちな「意識」という概念が内容的に不明確さを多く含んだり方法的個体主義を含意して

しまったりすることから、その反省にたち、そうではなく「意味世界」「社会的世界」という概念を用いることにより、物理的な集団状況や地理的範囲とは異なる下位分化ないし言説空間をも論題化してゆくこととなる。

(3)このような方法とテーマを掲げた聞き取りには、対象者たちの世界にきわめて親しく接近することが必要となる。そしてそれは、単なる手続き論を超えた調査倫理や研究倫理の問題を提起するものである。また、ここ10年ほど、質的分析に関する議論においては、これまで自明とされていた研究者—当事者の二分法や第三者的・客観主義的著述法について疑問が提示され、代替的な考え方が論じられるなど、新たな展開が著しい。そこで、研究倫理や調査行為を基礎づける最新の理論および技術の導入と展開をも、研究課題として加えることとする。

### 4. 研究成果：

研究期間を通じ、これらの課題にとりくんだが、もとより対象者との関係形成や連絡調整などは細やかな配慮と多大の手間を要する作業であるし、またなにより、各地でのとりくみも模索的で流動的な段階にあることが多かったことなどから、フィールドワークは計画よりも遅延しがちであった（他に、計画遂行途上で研究代表者が学会運営の役職者に選出されて多忙を極めたといった外的な要因も重なってしまった）。複数の対象地を選定してあったが、進捗度もまちまちである。とくに、「小集団営農」それじたいを具体的な対象とする調査研究には至りついていない。

しかし、これまでの概況把握や事例への参与観察などから、「営農志向の集合的な形成」について、次のような知見が得られてきている。

(1) 対面的な集合過程が非常に強い学習的効果を有すること。それが農家自らの生産・生活営為への意味付与を生み出しており、そのちがいによって社会的世界の分化を生んでいること。また、政策への対応へのいわば媒介過程として集合現象が介在していることがしばしばあること。

①この集合過程においては、とくに、男性のみならず女性の参画が重要なファクターとなっている。たとえば、山形県庄内地方の稲作地帯では、プラスアルファ部門に新しい畑作物を企画・開発する際、比較的若い世代の女性たちが重要な役割を果たした事例が見られた。これらは当人たちにとっても一からの学習となることが多く、その場合、同輩の中間の存在が貴重なものとなる。彼女らは他方で家事や育児の担い手であることも多く、こうして女性の役割は生産と生活の両面にわたるものとなる。このような存在と

しての女性の参加により、営農志向の策定それじたいも、いわば生活の論理との調整という課題を含むことになる。これは、自律的な経営にとって大切なことである。

こうした女性の参加は、しばしば、生産物に「生活のにおい」「生産者の顔」を付与する材料となり、いわゆる差異化と物語消費の資源として機能している。このような流通・消費向けの意味付与が生産者サイドにはねかえって、「農家らしい暮らし」「農村らしさ」という意味付与を生み出している場合も珍しくない。

地域も生産部門も異なる対象地、北海道の酪農村においても、これに近似する事例を多く見ることができる。当地でどんな決まり文句が語られているかは質的分析の着目点のひとつだが、この地域の場合、そのような定型句のひとつに「男のロマンは女のフマン」というものがあつた。すなわち、男は強がりと言って身の丈を超えた経営規模を一気に達成しようとするものだが、それで生活を犠牲にしまいかねない本末転倒の危険があるというのである。実際、聞き取りによって役割分担や生活満足度などを調べてみると、女性が経営になんらかの形で参画している農家ほど経営の計画性が高く（これは規模の大小を問わない）、家族時間も確保できている。むしろ両者は、家族の団らん時間があるので経営についての話し合いも盛んで、農作業や経営方針がそのように計画的におこなわれるから家族時間も確保できるというように、相互促進の関係にある。また、そうして生み出された時間をもちいて女性が学習活動に参加しているかどうかが大きく介在していることがうかがえる。これはやはり、生活と生産との総合的なおりのうえに、その時々の時勢に流されない自律的な営農を模索してゆくうえで重要なことである。

このような自律的な経営のなかからは、従来は（少なくとも当地の伝統文化としては）存在しなかった「農村文化」「農家文化」をつくりあげる模索が始まっている。農家女性を主たる成員とする「農家チーズ」「台所チーズ」のとりくみがそれである。先の例にみた農村性の再認識の場合と似て、いわゆる伝統の伝承ではなくこうした創造活動のなかから当人たちにとっての「農家らしさ」の意味が構築されている点は興味深い。それが地域社会の存続やエコロジーの観点などと折り重ねられて正当化の論理を身につけ始めている点は、今後、とくに注目しなければならない。

②タテ関係を前提とした啓蒙・普及ではなく車座の対等性（あるいは語り合う関係が聞き合う関係でもあること）が重要であること。その形として、自覚的に推進されたことであるかどうかは別として、③日常とはやや異な

る集まりの機会が存在することが重要なファクターとなっている。というのも、日常の家庭や世帯代表制の地域組織においては、既に固定した会話ルールやフォーマルな話題、支配的物語といったものが習慣的に作動しがちだからである。だが、それはまた単にウラの集まりにおけるグチ大会といったものにとどまってもならない。むしろ、陰口として表現されるにとどまるストレスや不満を単なる憤懣としてではなく、いまの生活を自己点検し、生産と生活とのあいだのおりあい点をさぐってゆくための願望を自覚化してゆく機会となり、しかもその後、参加者たちの自己コントロールにつながるほどの実効性がなければならない。④そのためには、上述の論点ともかかわるが、生産と生活の両面にわたる話題の多様性が確保されるほどにはルールや原理が明確化されてなくてはならない。しかし、⑤なかでも具体的な体験や生活史の語りの交換が重要な役割を果たしているので、個人的な語りが歓迎されるほどに自由で気軽な雰囲気が存在しなければならない。

こうした点からの考察にとって、集まりの場がどんな論理で構成されているかは重要な検討課題であるが、いろいろなパターンが存在しうる。同輩者の仲間集団は、この条件を満たしやすい。場合によれば、生産とは別個の集まりの機会、たとえば運動会運営の後のお父さんたちの飲み会の場などが政策への対応についてインフォーマルに意見交換する場として機能し、上述のような性質を帯びる場合もある。有志的な学習会の場においても、それが、指導者や識者の話を皆が一斉に聞くという形をとるのか、向かい合いの座席関係のなかでの問はず語りという形をとるのかで、何が語られるのかがちがってくる。道東の酪農地帯で展開している酪農交流会は、まさに上記のような条件・性質を備えた集まりであると特徴づけることができる。

⑥これらについてのフィールドワークのなかから浮かび上がってきた「副産物」の一つとして、具体物の重要性が挙げられる。すなわち、第一には、稲作地帯なら米はもちろん、転作活用のプラスアルファ部門としてとりくんだ畑作物、酪農地帯なら農家的な暮らしの象徴としての手作りチーズといったものである。これらは単に「販売戦略としての差異化」としてのみならず、みずから享受すべきものでもあり、また、手渡しの交換によってコミュニケーションのメディアともなっている。すなわち、意味は確かに言説空間なり人と人とのあいだに形成されるものではあるが、それが凝固したと目される具体的な対象を必要とするのである。

第二には、「書かれたもの」の重要性がある。たとえば成員間で手渡しの原理で共有さ

れることになる「通信」の類、それに代表される著作物（個人的なものであろうと公刊されたものであろうと問わない）、自前の経営分析表、あるいはその地域に居住する（出入りする）他者による作品（絵画や写真）などが、重要なコミュニケーション・メディアになると同時に、いわば自己対象化の機会を提供している。

このような「表現」行為の重要性が、今後、さらに検討されるべきであると思われる。

(2) 自由市場状況が要請する生産物の差異化は営農志向の分化を促しており、これにともなう、農家のなかでも社会的世界の分化が進行しつつある。

①上述のように、少なくとも家族経営の農業を前提とする限り、生産・経営戦略の選択は、家族生活や地域生活と分離したこととしては存立し得ない。稲作地帯の場合を例にとってみると、水稲専作で規模拡大をはかるのか、転作利用の複合経営を目指すのか、兼業を主体にするのか、といった選択は、家族内の労働力をいかに配分するかという問題にほかならない。ある選択をした場合、親子関係はどのようなものになるのか、夫婦の役割分担はどうなるのかなど、家族像やジェンダーが問われる課題となる。この点について、家族も個別化しつつあるとのよくある見解は、少なくとも農家においては単純な意味では通用しない。ライフスタイルの私事化と見える行動であっても、それはこのように調整された個別化なのであり、大前提として家族の生活保障という問題がクリアできてなければならないからである。

②今日の自由市場状況は、農家に流通や消費をも視野におさめた経営戦略を要請している。その折り、生産コストと消費者の品質志向とは、ことにぶつかりあいがちな問題である。コメの高品位生産地帯である山形県庄内地方においても、標準的なコメづくりと個性的なコメづくりとが混在しつつある。有機米、減農薬、地球にやさしいといったボキャブラリーによって正当化される農業が、さらに分化を遂げ、〇〇村の減農薬、〇〇さんのこだわり米のように訴えられ始めている。これに対応して、それにどんなメッセージをパッケージするのか、いかなる手段で消費者に届けるのか、分化が生じつつある。これによって、消費者と生産者の関係性をどのようにイメージするのか、自らの営農をどのような論理で正当化するのかにおいて、差異が生じつつある。

北海道の酪農地帯の場合、消費地と遠距離であること、生乳の処理は大きな施設での一元管理を必要としていること、個別販売が困難なことなどから、流通や消費を視野に入れた営農志向は形成されにくい状況となっている。そこで語られる自然環境と調和した農

業も、主として生産現場における自然界との物質代謝の実態（糞尿問題や飼料問題）に即して言われているのであり、必ずしも販売戦略の論理ではない。そこには自給的な小農の論理が見られる場合もある。だが、そのことが自然とのバランスのとれた物質代謝という農の基本原理にたちもどった内省を生み出している点には注意すべきであろう。地産地消や食育、安全・安心といった論理が、これに重ねられている場合もある。これと、いわゆる競争原理、また、低価格での安定供給の論理とは、しばしば対立する原理である。このように、同一地域の内部においても、種々の論理（意味世界、社会的世界）が分立するようになってきている。

③このように、ある論理なり意味世界は、一般に、それ単独で存在しているのではなく、複数の異なる論理や意味世界の葛藤・競合・拮抗などのなかに存している。農業生産と営農志向のいわゆる多様化は、かかる意味での葛藤・競合・拮抗を生み出している。そして重要なことに、農家の学習活動がこの異なる社会的世界毎に持たれる場合が存在する。

これを、従来の有志的な施設利用・機械共同などとは区別して、同志的な結合と仮に呼ぶとするならば、形成途上にある小集団営農がどの程度このような性格を帯びてゆくかが、今日の自由市場状況下における営農志向研究にとって一つの探究課題となる。

——こうした知見を得てはいたものの、主に上述のような事情により、とりまとめには至り着くことができなかった。フィールドノートや資料集の作成などは進展しているので、継続的にとりくめば、来年度もしくは再来年度に、複数の学会発表もしくは論文執筆に着手できる計画となっている。

(3) 質的分析法については、研究代表者も参加する研究チームでの共同作業から、語られたことと書かれたこととの関係をはじめ、重要な知見を数多く得た。その成果は、Schwandt, Th. A., 2007, *The Sage Dictionary of Qualitative Inquiry*, 3<sup>rd</sup> ed., Sage Publications の邦訳となって発表される予定となっている（研究代表者は監訳）。これは国際的にも定評のある辞書であり、日本においても社会学・社会心理学・心理学・人類学などにおける質的分析のひとつのスタンダードになることはまちがいないであろう。

質的研究の最新の理論・方法・倫理などは、ポストモダンの見地を表明することが多い。それはしばしば、従来の写実主義的なエスノグラフィーなどに対する批判を含んでいるので、一見「なんでもあり」の相対性にゆきつく懐疑論ではないかと思われることもある。だが、ポストモダンによる批判の多くは著述をめぐるもの、それとの系論でフィールド関係の内実を問うものであって、端的に言

えば、写実主義が著者を透明な存在にしてしまった結果として研究者の責任を問いつらい論理になってしまっていたことが批判的吟味に付されているのである。こうした反省的吟味で得られた洞察を今後の研究のなかで具体化することが、次の課題となる。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 0件)

〔学会発表〕(計 0件)

〔図書〕(計 0件)

〔産業財産権〕

○出願状況(計 0件)

○取得状況(計0件)

〔その他〕

#### 6. 研究組織

##### (1) 研究代表者

徳川 直人 (TOKUGAWA Naohito)  
東北大学・大学院情報科学研究科・准教授  
研究者番号：10227572

##### (2) 研究分担者

なし

##### (3) 連携研究者

なし